

レジリエンス能力の解明に向けた中村良夫の解剖

野中 康弘¹

¹正会員 株式会社 道路計画 (〒170-0013 東京都豊島区東池袋2-13-14 マルヤス機械ビル)

E-mail:y_nonaka@doro.co.jp

わが国は、国・自治体の財政上も、交通企業の経営上も社会基盤投資が困難な状況下にあつて、従来に増して複雑で対応が難しく、質的な転換も求められるインフラ計画の時代を迎えている。加えて、近年ではプロジェクトの減少も相まって、土木エンジニアのレジリエンス能力の低下が危惧されている。リスクや不確実性、複雑性などによって意思決定が困難なプロジェクトに対峙する能力を有する土木エンジニアの育成は喫緊の課題であり、これまでに難プロジェクトを成功に導いた先駆者の経験にこそ、そのヒントが秘められているものとする。そこで本研究は、景観分野の開拓者である中村良夫東京工業大学名誉教授をとりあげ、レジリエンス能力の形成プロセスを解明することを目的として、全10回に及ぶデプスインタビューを実施し、ライフストーリーデータを構築した。

Key Words : *Resilience Skills for Infrastructure Planner , Oral History Life Story Data*

1. はじめに

わが国は現在、大規模災害対策、老朽化インフラ対策、超高齢社会への対応、国際競争力強化、地球温暖化対策、アジア諸国へのインフラ投資協力など、従来にも増して対応が難しいインフラ計画の時代に直面している。同時に、国・自治体の財政も交通関連企業の経営もインフラへの投資が極めて困難な状況にある。

一方で、バブル崩壊後の「失われた20年」の間、新規インフラ投資が激減したことや、困難なプロジェクトを達成した経験をもつ土木技術者の退職によって、蓄積された技術や経験の継承が困難になってきている。既に社会で惹起しているのは、大規模なプロジェクトに対する土木技術者自身のネガティブな反応や、検討のテーブルにつくこと自体にナイーブになるなど、有益なインフラ整備への労力を惜しみ始めていることである。

さらに、プロジェクトの減少は、研究者の実プロジェクトへの参画経験の減少を招き、第三者としてプロジェクトの価値と各関係主体の意図や判断を俯瞰して、プロジェクトの障壁を新しい発想や研究知見で解決する能力をも低下させる。このようなネガティブ・フィードバックを反転させ、困難なプロジェクトの遂行に適応する人材を育成することが喫緊の課題である。

そこで、プロジェクト遂行にあたって数多くの困難な局面を打開した経験をもつ先駆者から、その貴重な暗黙知をアーカイブとして残し、後進がレジリエンス能力を

習得できる環境を整備することが重要であると考えた。

本研究ではその一環として、景観分野の開拓者である中村良夫東京工業大学名誉教授をとりあげ、レジリエンス能力の形成プロセスを解明することを目的として、全10回に及ぶデプスインタビューを実施し、ライフストーリーデータを構築した。

本研究が最終的に目指すところは、難易度の高いプロジェクト遂行時に発揮されたレジリエンス能力を見出し、既存研究におけるレジリエンス能力の構成要素と突合したうえで、その形成プロセスを解明することである。しかし、本研究はようやく端緒についたばかり故、本稿は中村良夫氏のデプスインタビュー調査の概要を整理するとともに、若干の定性的考察を加えたうえで、レジリエンス能力の解明に向けたアプローチの視点を整理するとどまる。このような道半ばの稚拙な論考の段階で本稿を著すに至ったのは、本分野におけるレジリエンス研究の議論をいち早く喚起すべきと考えたことに他ならない点を承知いただきたい。

2. インタビュー調査の概要

(1) インタビュー計画

インタビューは、時系列で進めることによって記憶も蘇りやすいのではないかと考え、まず最初に幼少期から少年期までを対象とし、次いで高校から大学時代、それ

表-1 インタビュー調査のスケジュールとテキストデータの取得状況

開催回	インタビュー計画	インタビュー内容	開催日	開催時間	テキスト 文字数(時間)
第0回	研究計画の説明	研究趣旨およびインタビュー計画の説明 ※古河公方公園を案内いただく	2016年7月16日(土)	13:30~16:30	-
第1回	幼少期~中学時代 (生誕~15歳くらい)	幼少期~中学時代	2016年9月3日(土)	13:30~16:00	30,400 (2:07:24)
第2回	高校~大学時代 (16歳~20歳代前半)	高校~大学時代	2016年10月8日(土)	13:30~16:30	26,348 (3:02:22)
第3回	日本道路公団~東大助手時代 (20歳代後半)	日本道路公団~東大助手時代	2016年11月12日(土)	13:30~15:30	29,394 (1:48:15)
第4回	パリ大学~東大講師時代 (30歳代前半)	パリ大学~東大講師時代	2016年12月10日(土)	13:00~16:30	45,358 (2:58:57)
第5回	東工大助教授時代 (30歳代後半~40歳代前半)	太田川プロジェクトを中心に	2017年1月8日(日)	13:30~16:30	45,769 (2:44:37)
第6回	東工大教授時代 (40歳代後半)	風景学入門を中心に	2017年2月4日(土)	13:30~16:30	23,281 (2:48:51)
第7回	東工大教授時代 (50歳代前半)	古河公方公園事業を中心に	2017年3月4日(土)	13:30~16:30	29,391 (2:36:01)
第8回	東工大教授時代 (50歳代後半)	橋梁デザインを中心に	2017年4月1日(土)	13:30~15:30	29,481 (1:55:01)
第9回	京大教授時代/退官後の活動 (60歳代前半~現在)	恩師を語る~鈴木忠義先生~	2017年5月13日(土)	13:30~16:00	29,218 (2:14:09)
第10回	全体確認		2017年5月13日(土)	13:30~16:00	-
合 計					288,640 (25:52:53)

以降は概ね5年単位で区切る計画とした。これにより、全体で10回程度のインタビューの実施を想定した。

1回当たりのインタビュー時間は2時間程度とし、各回のインタビューでは、当該期間の中で5つ程度の経験的逸話を事前に準備いただき、タイトルを付していただくこととした。

さらに、逸話の内容にレジリエンス能力の育成に関係する発話がある場合には、逆境の内容やその時の思考、困難への対処等について確認することとした。

(2) インタビューの実施状況

インタビュー調査のスケジュールとテキストデータの取得状況を表-1に示す。インタビュー調査は全10回実施し、総時間は25時間52分、録音データの書き起しによるテキストデータは288,640文字に及ぶ。

各回のインタビュー内容は、次のとおりである。まず最初にプレインタビューとして研究趣旨を説明し、インタビュー調査の実施予定を調整した。インタビューは概ね5年単位を区切りとして年代ごとに行う予定としたが、特に大学教員時代において携わったプロジェクトが長期にわたるケースが多く、年代を大きく跨ぐことから、話題の連続性の都合上、プロジェクト単位でインタビューを進行した。各回のインタビュー時に準備いただいたタイトルや主なキーワードは極めてユニークであり、本研究への示唆に富んだ意味を持つものが多いため、そのまま引用して以下に列挙する。

第1回は、幼少期~中学時代(生誕~15歳くらい)を対象とした。中村良夫氏は、この時代を『異境と越境の旅-二つの故郷-』として述懐した。主なキーワー



図-1 インタビュー実施状況

ドは、生誕から青山時代/古河という異境へ/谷戸という小宇宙・異界への迷い込み/終戦と無常体験/祖先の話/大宇宙というもう一つの異界へ/越境通学/鉄道という巨竜/技術への関心の芽生え等である。

第2回の高校~大学時代(16歳~20歳代前半)は、『**教養学的な知的放浪癖に感染-そして迷いと感動の時代へ-**』として述懐し、主なキーワードは、教養学的な知的放浪癖に感染-日比谷高校時代-/浪人時代/迷いと感動の時代/東京大学工学部土木工学科へ/卒業研究と就職活動/未知との遭遇-フランスへ卒業旅行-等である。

第3回の日本道路公団~東大助手時代(20歳代後半)は、『**他流試合への旅路-東大助手時代-**』として述懐し、主なキーワードは、日本道路公団から再び東大へ/大転換時代・昭和30年代の研究室の変貌/計画学・計画情報学へシフト/知的冒険と怒涛の日々-私の研究-

／「土木空間の造形」へ一貫して研究の通奏低音となる一／自動車運転者の注視点の研究等である。

第4回のパリ大学～東大講師時代（30歳代前半）は、『フランス留学の余韻からその発酵へ～東大講師時代～』として述懐し、主なキーワードは、フランス留学～好奇心全開の時代、ヨーロッパとは何か？～パリ大学国際都市と留学生仲間との交流／中世への関心の芽生え／学位論文等である。

これ以降は、プロジェクトあるいはテーマ単位のインタビューとなり、第5回は、『初めての景観プロジェクトの実践～東工大助教授時代から～』として、太田川プロジェクトの取組みについて解説いただいた。第6回は、『風景学入門～その軌跡をめぐって～』として風景学入門に至る経緯や想いについて解説いただいた。主なキーワードは、きっかけと周辺／市民学という発想／ヒントになった現象（知的まわりみち）／副産物（言語への関心・他分野との出会い）等である。

第7回は、中村良夫氏のライフワークともいえる『古河公方公園について（湿地転生の記）』、**Approach winter 2016**』として、この事業に至る経緯や想いについて解説いただいた。主なキーワードは、小倉市長（当時）との出会い（縁起性・出会いの力）／都市公園法の公園はなぜつまらないのか？／故郷という情念・情念力・執拗力／デザインの発想・発想力／デザインの再定義へ（パラダイム転換力）／公園から未来型コモンズへ（構想の要約力）等である。

第8回は、『橋梁デザイン』として、中村良夫氏が取り組んできた橋梁デザインについて解説いただいた。

実質的な最終回である第9回は、『恩師を語る～鈴木忠義先生～』として、中村良夫氏の恩師である鈴木忠義先生の人物像や思想、様々な薫陶について語っていただいた。

3. ライフストーリーの概要

中村良夫氏のライフストーリーテキストデータは、前述のとおり膨大な量に及ぶことから別途とりまとめる予定であり、本稿では紙面の都合上その概要を紹介するにとどめる。また、インタビュー記録のうち、後半の各種プロジェクトへの関与や研究論、技術論に関する部分も上述のとおりまとめに譲り、本稿では、中村良夫氏の生立ちや思想形成に大きな影響を及ぼしたであろう教育期における経験や出会い、エピソードなどに着目して、ライフストーリーの概要を紹介する。

なお、中村良夫氏の略歴や主な出来事、主な研究業、主なプロジェクトを表-2にまとめた。

(1) 幼少期～小中学校期

『異境と越境の旅～二つの故郷～』

a) 生誕から幼少時代

生誕から青山時代：中村良夫氏は、1938年（昭和13年）4月3日、麻布日赤産院で生まれた。二・二六事件の時には反乱軍の銃声が聞こえたといわれる、東京都赤坂区青山南町の青山墓地に面した借家で、目前に墓地という異境で幼少期を過ごした。乃木希典大将や大久保利光公の墓や青山斎場などを遊び場とし、時には麻布3連隊の演習通信兵たちと遊んだ。次第に軍事色が強まると、外苑前地下鉄入口には憲兵隊詰所ができ、食料が滞るようになると、母と国分寺あたりの農家へ食料探しに出かけたりもした。

古河という異境へ：1944年（昭和19年）5月頃、茨城県古河市へ強制疎開した。東北本線で利根川橋梁を渡る轟音に、隣席の老婆が恐怖で合掌していた。古河駅に到着し、駅前に乗り合い馬車（トて馬車）を見て仰天、生まれて初めて馬を見た。村沢旅館に逗留して家の完成を待ち、八百屋の裏の材木小屋を改造して住んだ。

谷戸という小宇宙・異界への迷い込み：遊び場は、隣の浄善寺、再び墓地と隣り合わせる。庭木戸の向こうに田んぼ、小川、長谷村の神社、牧野寺の香取神社の森が見える長閑な谷戸が広がっていた。谷戸は自然の博物館で、ザリガニ、ドジョウ、トンボ、セミ、蛍、鮒、鯉、蚕の繭、ザリガニの産卵を観察、セミの変態と戯れるも、蛇には閉口した。何しろ見るものすべてが新しかった。

b) 小学校時代（低学年）

戦争と無常体験：1945年（昭和20年）4月、古河国民男子小学校に入学した。同年8月15日の玉音放送の後、父が出征先の佐倉の連隊から軍服で帰宅した。同年9月、妹（沖ななも）が生まれた。¹⁾玉音放送から数週間後にはラジオからジャズが流れていた。1946年（昭和21年）2月1日には、軽快な「come come every body」のフレーズでNHKのラジオ英語講座も始まった。子供ながらに体制崩壊の儚さを知る。

1946年（昭和21年）2月16日には、戦後のインフレ対策として新紙幣（新円）の発行が発表され、現金資産は戦時国債と同様に無価値同然となった。母が紙くずになった軍事国債を破いていた。毎日、大根の葉と僅かに麦の混じったおじやで暮らした。農家を周り、母の衣服と物々交換で食料を得た。庭で飼っていた鶏が卵を産むのに興奮、これほどの喜びと興奮を始めて知る。大工に頼んで鶏を食料とする親に反抗、それ以後鶏肉を口にしていない。沖電気の社員であった父は失職した。疎開者の生活は苦しかったが、祖母を含め家族6人の生活は賑やかで悲壮感はなかった。

祖先の話：祖母から昔話をよく聞いた。「阿波の十郎兵衛、巡礼歌の段」初めて文学に涙した。祖父母とも

時代	西暦	和暦	年齢	経歴・主な出来事	主な研究・業績	主な委員会・重要プロジェクト等
■幼少～中学時代 (～10代前半)	1938	S13	0	生誕 東京市赤坂区青山南町		
	1944	19	6	強制疎開で茨城県古河市台町へ転居		
	1945	20	7	古河町立男子国民学校入学		
	1946	21	8			
	1947	22	9			
	1948	23	10			
	1949	24	11			
	1950	25	12			
■中学～高校時代 (10歳代後半)	1951	26	13	古河市立古河第二小学校卒業 古河市立古河中学校入学 浦和市立白幡中学校へ転校		
	1952	27	14			
	1953	28	15			
	1954	29	16	浦和市原山へ転居 浦和市立白幡中学校卒業 東京都立日比谷高等学校入学		
	1955	30	17			
	1956	31	18			
	1957	32	19	東京都立日比谷高等学校卒業		
■大学時代 (20歳代前半)	1958	33	20	(浪人時代)		
	1959	34	21	東京大学教養学部入学		
	1960	35	22	東京大学工学部土木工学科へ編入		
■日本道路公団時代 (20歳代後半)	1963	38	25	東京大学工学部土木工学科卒業 日本道路公団入社	卒業論文 『土木構造物の工業意匠的研究』	
	1964	39	26	東京都港区青山南町へ転居	自動車運転の眼球運動研究 ドイツ流の高速道路ランドスケープを研究	
■東京大学助手時代 (20歳代後半)	1965	40	27	東京大学工学部助手 鈴木忠義先生から大学に戻るよう勧誘 「景観工学を研究せよ」と厳命を受ける		
	1966	41	28			
	1967	42	29		「土木空間の造形」 (景観記号学を構想)	
■パリ大学時代 (30歳代前半)	1968	43	30	東京大学工学部講師 パリ都市計画学院入学(文部省在外研究員) 西欧都市を次々と探訪	(模索の時代)	
	1969	44	31		景観工学の基礎的研究	
■東京大学講師時代 (30歳代前半)	1970	45	32			
	1971	46	33	東京都新宿区市ヶ谷薬王寺へ転居		
	1972	47	34		博士論文 『道路線形の透視形態に関する理論的研究』	
	1973	48	35	工学博士(東京大学) 結婚		
	1974	49	36			
■東京工業大学助教授時代 (30歳代後半～40歳代前半)	1975	50	37	東京大学工学部助教授		
	1976	51	38	東京工業大学工学部助教授	水辺景観の研究	● 広島太田川基町護岸 (調査から設計・施工まで体験) (景観工学の初めてのデザインを実現)
	1977	52	39	東京都新宿区上落合へ転居		
	1978	53	40		仮想行動の理論 (現象学的方法の導入)	
	1979	54	41			
	1980	55	42			
	1981	56	43			

時代	西暦	和暦	年齢	経歴・主な出来事	主な研究・業績	主な委員会・重要プロジェクト等
■東京工業大学教授時代 (40歳代後半)	1982	57	44	東京工業大学工学部教授	景観から風景へ「風景学入門」(中央公論社) ※サントリ学会賞	広島太田川基町護岸 (調査から設計・施工まで体験) (景観工学の初めてのデザインを実現)
	1983	58	45		※土木学会著作賞	
	1984	59	46		大地の低視点透視線の 景観論的特質に関する研究	
	1985	60	47		風景学の原論的研究	
	1986	61	48			
	1987	62	49			上谷手大橋(住宅公 レインボーブリッジ基本設計
	1988	63	50	パリ大学社会科学高等研究院招聘教授 A. Bergueとの出会い	社会・環境システム史からみた アメニティの位置づけの研究	古河総合公園見直し委員会 座長
■東京工業大学教授時代 (50歳代)	1989	H1	51			太田川渡河部橋梁デザイン委員会 座長(広島西大橋) 古河総合公園 設計・施工・運 営
	1990	2	52			東京国際空港 景観検討委員会座長 (Ⅱ期・Ⅲ期)
	1991	3	53			
	1992	4	54			古河総合公園 設計・施工管理
	1993	5	55		「都市空間論」(新体系土木工学)	東京港臨海道路橋梁 景観等検討委員会座長 (東京ゲートブリッジ)
	1994	6	56			
	1995	7	57			
	1996	8	58	東京工業大学大学院 (社会理工学研究科評議員)	※国際交通安全学会賞	
	1997	9	59			
■京都市大学教授時代 (60歳代前半)	1998	10	60	京都市大学院工学研究科教授 (東京工業大学併任教授)	「風景感覚1・2」(技法堂)	
	1999	11	61	東京工業大学退官	「橋梁アーキテクチャーの研究」	古河総合公園 パークマスター 制始動
	2000	12	62		「地形と敷地構成に関する研究」	
	2001	13	63		※土木学会出版文化賞	東京国際空港 景観検討委員会座長 (Ⅲ期後期)
■退官後時代 (60歳代後半～)	2002	14	64	京都市退官(定年) 東京工業大学名誉教授	「風景学・実践編」(中央公論社)	
	2003	15	65		「風景を愉しむ、風景を創る」(NHK出版) ※ユネスコ「メリアルクレーリ賞」(古河総合公園)	
	2004	16	66		「風景を創る」(NHK出版) ※土木学会出版文化賞 ※土木学会景観デザイン特別賞	新タワー候補地に関する 有識者委員会座長
	2005	17	67	東京都中野区東中野へ転居		
	2006	18	68		※土木学会功労賞 ※土木学会名誉会員	
	2007	19	69		「湿地転生の記」(岩波書店)	
	2008	20	70		「風景からの町づくり」(NHK出版)	
	2009	21	71			
	2010	22	72		「都市をつくる風景」(藤原書店) ※国際交通安全学会賞	
	2011	23	73			
	2012	24	74		景観・コミュニティ・環境デザインの 風土論的統一理論の研究	スカイツリー開業 軽井沢未来構想 会議座長
	2013	25	75		La Raison-Coeur des co-suscitatiois paysageres	
	2014	26	76		日本都市文化の特性比較社会史的 研究「風景とローカルガバナンス」(早大出版、編著)	古河総合公園 運営管理に断続的 に開与
	2015	27	77			軽井沢22世紀風土 フォーラム顧問
	2016	28	78			
2017	29	79				

真田藩士土族の末裔で「お前は真田の家来の子だ」が口癖であった。父母は貧乏暇なしであったため、躰や精神的な薫陶は祖母だけであった。母の薫陶はただ一つのみ「人と同じことするな」であった。父は都会育ちの武家の末裔で、「米のなる木」を見たことがなかった。時折、松代へ行くと「若様」と呼ばれたそうであるが、生活はもっぱら母に頼っていた。1948年（昭和23年）頃に代用教員として古河第一小学校に奉職し、生活もかなり安定した。1947年（昭和22年）9月、カスリーン台風が襲来した。渡良瀬川の右岸が決壊し、濁流が北川辺町を飲み込んだ。水害の恐怖を知る。

c) 小学校時代（高学年）

大宇宙というもう一つの異界へ：小学5・6年生の頃は、天体観察に熱中した。50mm 反射望遠鏡を製作し、銀河系宇宙、アンドロメダ星雲など、それぞれが独立宇宙と知り仰天する。望遠鏡制作にも熱中したが、反射鏡磨きは断念、誠文堂新光社の反射鏡を注文し、一日千秋で待つ。マウンティングに集中するも、鏡とプリズムの微調整に苦勞した。縁側からお寺の大銀杏の先端へ照準をあわせ、光軸とファインダーの調整をした。銀杏の実が視野いっぱいに見えた。天体観測。月食、星食、太陽黒点、変光星周期、流星群、月面観察、木星ガリレオ衛星の動きに興奮、天体の美と神秘に心を奪われる。この頃には天文学者を志し、月食の開始時刻の計算にトライするもあえなく挫折した。数学の重要性に気付く。親は天文学に熱中する我が子を不安視したが、制止を振り切った。

d) 中学校時代

越境通学：1951年（昭和26年）4月、古河町立古河中学校へ進学した。同年6月、敬愛する祖母が死去した。同年9月、浦和市立白幡中学校へ越境転校、古河から浦和間を汽車で通学した。朝5時に起き、霜を踏んで古河駅へと歩く。母が薪で炊事、弁当を拵えてくれた。母の苦勞を思うと頭があがらない。満員列車、潰されそうになる遠心力も、あまり苦にならなかった。

鉄道という巨竜：古河から浦和間は、実物の鉄道博物館であった。市販の時刻表から鉄道ダイヤグラムを作成した。大宮駅駅長に懇願し貨物列車の入った本物入手、本物の図面の迫力に触れた。C57 機関車運転席にも乗った。機関士に懇願し、3回に1度は許可が下りた。利根川橋梁を渡る轟音、石炭の燃える熱気に興奮した。最新鋭電気機関車 EF58 の青写真も作成した。

技術への関心の芽生え：浦和は都会だった。生徒も都会の子だった。都鄙の落差を感じる。中学1年生時の担任の先生が北海道大学の数学科の出身で、生徒の成績を徹夜で統計分析していた。東京理科大学出身の理科の先生と二人で「解析概論」（高木貞治）を読んでいた。その後ろ姿に感銘した。生徒は、先生が教えたいと思う

ことではなく、先生の後ろ姿で育つものらしい。中学2年生時には、図画工作の自由課題で本の装丁表紙グラフィックデザインを提案した。上部に「火星の研究」のレタリング、下部の夕焼け空に街並み黒いシルエット、夕焼け空が次第に消えてゆく上空に大きな火星像（スキヤパレリリのスケッチを素材）を描いた。先生が強い関心を示したことに満足した。この頃の愛読書は、「無限と連続」や「微積分学入門」、月刊「鉄道ピクトリアル」など、集合論、位相数学、群論、抽象代数学、そして解析学の世界や抽象世界、技術への関心が芽生える。1953年（昭和28年）、中学3年生になると、次第に受験色が強まる。1954年（昭和29年）3月、東京都立日比谷高校への進学が決定し、再び越境入学へと向かう。

(2) 高校～大学期

『教養学的な知的放浪癖に感染—そして迷いと感動の時代へ—』

a) 東京都立日比谷高校時代

教養学的な知的放浪癖に感染：1954年（昭和29年）4月、東京都立日比谷高校に入学した。昭和初期モダンの校舎、アイビーに覆われ、庭にイチョウの大木、明治・大正期の渡辺銀行頭取の屋敷跡で、江戸時代の侍屋敷の石垣の構えが残る。古河から上野駅を経て、赤坂駅へと汽車で通学、2時間半を要した。同年8月、10年住んだ古河に別れを告げ、浦和市原山に転居した。

日比谷高校の当時の校長は、菊池龍道という府立一中以来の名校長で、英国のパブリックスクールをモデルとした教育を実践していた。教師陣は、府立一中以来の先生が多く、感化力に優れていた。カリキュラムは水を打ったような知的緊張の100分授業で構成、教養学的香気が漲っていた。課外活動では、科学研究会に参加していた。文化祭での実験企画で、理化学研究所から Polonium の同位元素をもらい、ウィルソン霧箱で電子の飛跡の視覚化を執拗に試みるも失敗した。研究的情熱を思い出す。京都への修学旅行では、東京にはない歴史都市と風土性に強く揺すぶられ、特に日本庭園に魂を奪われる。竜安寺、南禅寺、大徳寺、大原の風向と寂光院に感動した。

この頃、座右の書と出会う。徒然草と方丈記。何が面白いのかわからないまま名調子に親しんだ（後年70歳を超えて兼好の文が身にしみるようになった）。漢文の教師の講義に心酔した。論語、唐詩、漢文素読の高踏的リズム感に惹かれ、本格的な教養学の香りを知った。父の書架のフランス語の辞書（Larousse illustré）を手に取り、仏語に興味を持った。第2外国語で仏語入門を履修、何となくフランスに関心を持つようになる。

b) 浪人時代

日比谷高校の一隅に設けられた補習科に籍を置き、高校4年生の気分で「解析概論」（高木貞治）に挑んだ。

2 年目でようやく目が覚め、受験勉強に身を入れた。駿台予備校に登録したが、あまり行かなかった。自己流でやるのが性分にあっていたようだ。

「ガロアの生涯—神々の愛でし人」を読み、エコールポリテクニクの入試に 2 度失敗し、王政復古の時代、政治闘争にまきこまれ、決闘に倒れた数学者ガロアに興味を覚えた。朱熹の偶成「少年老い易く学成り難し、一寸の光陰軽んずべからず、未だ覚めず、池塘春草の夢、階前の梧葉已に秋声」を愛誦した。¹²⁾

鬱々とした気分を時に旅に癒した。庄内の友人宅へ転がり込んで、湯野浜温泉で東北の夏を味わったりした。東北線電化が完成し、郷里古河の街を散策したりもした。

c) 大学時代（前半：教養学部）

迷いと感動の時代：1959 年（昭和 34 年）4 月、東京大学に入学した。教養学部の講義がつまらない。旧制一高時代の校長・新渡戸稲造の教養主義を期待したのは間違いであったか、それとも自分の不勉強のせいかわからない。教育とも研究ともつかない中途半端な講義で迫力がないと感じた。教師との波長がなんとも合わない。高校の方が教師の人格的迫力があり、ずっと香り高く感じた。憲法学、社会思想史など著名な教授の講義にも心を動かされなかった。唯一、製図の基礎となる画法幾何学に興味を覚えた。

安保運動など政治の季節に馴染めなかった。大学を背にして紫煙たなびく新宿、渋谷の名曲喫茶の暗がりやに沈殿することが多くなった。クラシックに親しむほか、ポルテニア音楽喫茶、黒人米兵が通うモダンジャズ喫茶に入り浸った。仏映画「太陽がいっぱい」のルネクレマンに心動く。ストーリーは平凡に徹し、イタリアの空気と匂いが主役の傑作である。フランス語の音色にも惹かれた。実存主義の雰囲気から生まれた「危険な曲がり角」に共感した。フランスやイタリアを見たいと思うようになった。退嬰的な雰囲気や沈み、将来の進路を模索しながら、高校の遊び仲間との交遊を楽しんだ。その中で山歩きを覚えた。北アルプス、白馬、唐松岳縦走～黒部峡谷、河原に湧き出た祖母谷温泉に浸かった。迷いから解放された超越的な気分の中から生命感を取り戻し、将来への希望が湧く思いがした。

c) 大学時代（後半：工学部土木工学科）

(続) 迷いと感動の時代：1960 年（昭和 35 年）4 月、東京大学工学部土木工学科へ編入した。中学以来、毎日の通学で鉄道に接していたせいか、漠然と橋梁や鉄道に惹かれていた。都市への関心もあったが、講義要項をみると土木・建築の双方に都市計画学があり、判断しかねた。農学系にも造園学の可能性はありそうだったが時間切れとなり、サイコロを振る気で土木進学に光明を見出そうとした。しかし、講義はやはり面白くなかった。分析ばかりで、土木とは何かというイメージがわからない。

青年の心を揺さぶる理想主義に欠けた。専門教育とはこういうものか、と諦めかけるが納得はしなかった。外来講師による都市計画の講義もあったが、法定都市計画だけでなくあくびが出た。¹³⁾ 土木工学科の図書室のカードを検索しても埒があかず、書架の間をうろついていると、石川栄耀の「都市計画」が目にとまった。「都市」という希望の光を感じた。こういう本が土木の図書室にあるだけで希望を感じた。

3 年生後期、プレートガーダー橋の設計と製図で初めてエンジニアの気分を味わった。製図のほか、課されてもいないパースをいたずら半分、反抗気分で描き、奥村教授に「君は才能あるな」と褒められた。何の才能かわからなかったが、こういうことをやっても良いのだということを知って嬉しかった。¹⁴⁾ 親友に建築進学者がいて、ときどき講義や演習をひやかしに行った。設計製図演習でトレーニングペーパーを手でデッサンをする際、「一度、作ったイメージを壊す勇氣を持って」とのこと、この手の作業は土木では「お絵描き」といって軽蔑していた。この時に建築には土木に欠落する「エスキス」という思想があることを知った。太田教授の建築史も一度聴講し、建築学には歴史という講座があることが印象に残った。土木と建築の個性の違いが、少しずつ飲み込めてくる。

1962 年（昭和 37 年）4 月、4 年生になって八十島義之助研究室の配属となった。鈴木忠義先生に卒論題目の希望を聞かれ、国土縮景の回遊庭園をモデルに土木のデザイン、景観などが勉強したいと申し出た。どうせ断られると思ったら、言下に「やれ！」というご下命に驚いた。この瞬間に自分の天命を知る。討論には応ずるが、指導などまったく無く一人前扱い。大学とはこういうものか、と目がひらき、感動した。大学で教授の人格に触れるのはこれが最初であった。¹⁵⁾ 卒業論文は、「土木構造物の工業意匠的研究」としてまとめあげた。就職に際して、先輩による就職説明会に出かけた。建設省の先輩の説明には共感できず、国家公務員試験には合格していたが、建設省への進路はなくなった。日本道路公団は片平信貴氏による説明があり、ドイツの道路景観論を知った。瞬間的に自分の進路が決定した。やっと、土木進学が正解だったと思える瞬間であり、高速道路にすべての希望を託した。

d) フランスへ卒業旅行

未知との遭遇：各大学工学部有志学生による団体海外旅行に参加した。南周り 50 時間、夜 10 時、4 発 DC-4 の機体が羽田の滑走路を離れた時、魂の飛翔を覚えた。初めての外国は香港、機内で始めマンゴーカクテル食し、異国の旅情を知った。灼熱のバンコック、カルカッタ、デカン高原の黒い混沌、ボンベイ、ダマスカスを経て早朝パリへ到着、まだ薄明のパリ市街へ入り、初めてシャ

ンゼリゼを見た。完成直後のパリ・オルリー空港間の高速道路（約 20km）の途中で、フレッシュの PS コンクリート歩道橋をみて土木デザインの可能性を確信した。土木専門学校歓迎会・ミレーヌ・ドモンジョに出席した。春浅く、紅潮する自分の頬に 3 月のみぞれを感じる毎日の中で、町中には近代建築、モダンデザインの影も形もなかった。コルビジエが唾棄した街並み、モダンデザインはどこへいったのか。

フランスを一周、まったく予期せぬ出会いがあった。シャルトル大聖堂と南仏のカルカソンヌ、中世とはこういうものか、と衝撃を受けた。西欧文明の基底をみる思いがした。まったく知らなかった西欧の原点であり、近代の対極であった。「ヨーロッパとはなにか？」という基本的な問いかけが生まれた。⁶⁾ 日本人は西欧文化を誤解していたのではないかと。帰路、ローマに寄った。数日の滞在中フィレンツェを突貫訪問し、サン・ジミニアーノ中世都市広場に感動した。

(3) 日本道路公団～東大助手時代

『他流試合への旅路』

a) 日本道路公団から再び東大へ

日本道路公団就職後、1 年半たった 1964 年（昭和 39 年）秋、鈴木忠義先生に呼びだされた。「東大へ戻れ」というご託宣だった。「5 年間は自由にやれ。その間に成果がでなければ、首だ」と宣告された。寛大で厳しいお誘いであった。日本道路公団にいる間も、財団法人高速道路調査会での勉強会に参加していたし、卒業研究のデザイン論とも連続していたので、研究生活に戻ることに抵抗はなかった。理由はもうひとつあった。景観理念が理論だけでなく、高速道路で技術化、現実化しているのを目のあたりにし、景観理念の土木全般へ及ぼす可能性を漠然と悟っていたので、鈴木忠義先生のお誘いでその可能性を確信した。「成果がでなかったら首」という言葉は、むしろ爽やかで好感が持てた。すぐに受諾の返事をした。

b) 研究室の変貌

大転換時代：遡ること 1960 年（昭和 35 年）12 月、池田内閣の所得倍増計画に呼応するように土木の一隅に変化の機運が生じた。生産技術研究所の星野和研究室は、道路基礎や舗装工学から、交通工学、幾何構造へシフトした。丸安隆和研究室は、コンクリートと支保工などから、空中写真・リモートセンシング、自動設計学へシフトした。河川研究室は、水理学中心の河道力学から、水資源工学（水文統計学、流出解析、水需要）へ移行する過程で、河川、流域の歴史研究へのシフトを開始した。このような計画工学への移行のうねりのなかで、八十島義之助研究室は、鉄道軌道研究から道路を含む交通計画、国土計画研究へ大きく舵を切り始めた。

計画学・計画情報学へシフト：鈴木忠義先生が 10 年に及ぶ農学部林学科での造園・観光研究を経て、八十島義之助研究室へ戻ってきた。⁷⁾ 当時の八十島研究室の扉には「一般交通工学研究室」の看板がかかっていた。この「一般」は、八十島義之助先生一流の幅広い戦略的玉虫色レトリックであった。このような時代背景の中で、「土木工学はニュートン力学一辺倒から脱して、土木人間学が必要」という鈴木忠義先生の思想が、すべての始まりだった。鈴木忠義先生の構想では、土木史学、景観学、観光学、交通計画学などがあり、総括的に文化人類学がモデルにあった。

c) 研究活動

知的冒険と怒濤の日々：1965 年（昭和 40 年）春、最初の著作である「土木構造物についての造形論」（土木学会誌 1965 年 4 月）を発表した。土木学会誌（八十島編集委員長）が初めて「土木デザイン特集号」を企画したことから、卒業論文を下敷きに執筆するに至った。これでいよいよ後に引けなくなった。工学部 1 号館の片隅に与えられた小部屋で、ともかく、5 年間でなんとか目処をたてる約束を守るため、苦闘の日々が始まった。ところが、外へ出かけて多くの先生に教を乞い、研究のための野外実験などもあって、昼間はほとんど研究室にいなかった。鈴木忠義先生の教えは、「昼間、研究室にこもるのは良くない。大いに学内外をうろろして、多くの優れた先生と討論するのが東京の総合大学の利点である。読書、原稿などは夜やればよい」だった。また、鈴木忠義先生は、活発な討論に応じたが、研究にはいっさい口出ししなかった。「先生は車（学生や若い研究者）のイグニッション・キーだ。車が動きはじめれば、幕の後ろにかくれる」と。

「土木空間の造形」へ——生続く研究の通奏低音となる——：「土木空間の造形」（1967、技報堂 11 月）は、土木造形に関して「議論するための共通の概念と言語」を用意するために著した。また、「空間構成の具体的方法を展開する方法」は課題として残す、という前提で書いた。そのための試論的なこの景観、デザイン的な理論モデルは、「重力の場」から「意味の場」へシフトし、ニュートン力学万能の土木工学にいわば総括的な土木人間学を導入しようとする試みであった。⁸⁾ これらは後年、「風景学入門」へと結実していくことになる。5 年の間に「土木空間の造形」を仕上げ、それが学位論文になればと思い始めた矢先、1967 年（昭和 42 年）2 月、急遽フランス留学が決まり、出発までにまとめることになった。実質 2 年半である。同年 9 月、羽田空港にて「土木空間の造形」の原稿を技報堂へ手渡し、パリ行き DC-8 に飛び乗ることになる。

自動車運転者の注視点の研究：日本道路公団時代に始めた研究に、自動車運転者の注視点の研究があった。

当時、東大の都市工学科に在籍していた鈴木忠義研究室が日本道路公団から受託したもので、継続して研究することになった。眼球運動の研究は、良好な道路線形に関する知見を得るといふ設計実務へ指針を与えたとはいえなかった。しかし、その研究過程で行われた眼球運動に関する他分野の研究者や研究成果の参照、視覚世界に関するゲシュタルト理論、ギブソン理論などとの継続的なつきあいは、その後の記号的意味世界の展開に役立った。

(4) 東大講師時代

『フランス留学の余韻からその発酵へ』

a) フランス留学

フランス留学-好奇心全開の時代：1967年（昭和42年）
9月26日午後10時、羽田空港にて「土木空間の造形」のまえがき原稿と文献一覧を技報堂へ手渡し、パリ行きDC-8に飛び乗った。海外渡航者はまるで出征兵士のように、万歳で送りだされた。早朝、左舷窓にマッキンレーの勇姿、アンカレジで朝ご飯、北極の氷原を夢見心地で過ぎた。オルリー空港上空にて航空管制着陸許可を待ちながら、眼下にボース平原の豊穡を眺めた。凱旋門裏の安宿で2泊の後、宿舎のパリ大学国際都市の日本館に到着した。

パリ大学国際都市と留学生仲間との交流：パリ大学国際都市は、第一次大戦後に Deutch de la Meurtre や André Honorat らにより創設された。⁹⁾ Thiers の城壁（7月王政下1844-47、延長33km）を撤去した跡地に建設した。緑豊かな37haに37か国から15,000人の学生と、外国研究者、教授が住んでいた。レストラン、カフェ、図書館、スポーツグラウンドが配置され、ダンスパーティー、語学教室、映画上映、郷土文化紹介、料理など国際交流行事も盛んであった。日本館文化委員（délégué culturel）として、すき焼きパーティー、黒澤監督7人の侍や小津安二郎などの日本映画を興行した。隣はスイス学生館、デンマーク館、スウェーデン館、イタリア館、スペイン館、ベルギー館に囲まれていた。特に、デンマーク、スウェーデン、米国館の文化委員とは昵懇になった。Jourdan 通りを挟んだ筋向いにオスマン時代建設のモンスーリ公園があり、150年の風格に打たれた。都市造りは蓄積であり、先進国の実力を思い知らされた。数知れぬ外国人留学生を育て、フランス文化を世界に広めたこの国際大学都市の存在は大きい。日本が見習うべきまことに優れた尊敬すべき組織である。

渡仏してまもなく、グランパレでアングル展を拝見し、名前も知らなかった古典派に感嘆した。近代芸術が目の敵にした古典主義とはどういうものか？東京芸大の芸術家たちにルーブルを案内され、アングル、ダヴィッド、ジョルジュ・ド・ラ・ツールなど、近代派が最も忌み嫌

った古典派を見た。西欧絵画といえば、せいぜい印象派までしか知らなかったのが、古典絵画の深さに驚嘆した。ギーデイオンやバウハウス近代建築派の立場からしか見ていなかったヨーロッパの深さに眼を開かれた。パリ市中に近代建築の痕跡はほとんどなく、国際都市内にコルビジェのスイス館、ブラジル館があるのみだった。

中世への関心の芽生え：フランス中世文学（狐物語）の専門留学生と交流し、ルネサンス以前の中世世界への関心が芽生える。パリ都市計画学院に登録するも講義は夜のみ、法律、政治学、地理学など工学的デザイン論などは少なく、やや拍子抜けした。1968年（昭和43年）に年が明けると、ドゴール政権末期の政治に対するデモで3月頃から休講が多くなった。同年5月、ソルボンヌ周辺は治安部隊と学生が衝突、催涙ガスに目が震んだ。パリ大学も閉鎖されたので、もっぱら都市、道路関係の役所を訪問し、インタビューと現場視察を敢行した。新空港計画、国土幹線高速道路など視察にはこと欠かなかった。給費だけでは旅費が足りないのので、東大の給料を全額送金してもらい旅費にあてる。これで帰国時の預金はゼロになった。

b) 学位論文

ある時、パリ大学の書籍部でオンデルマル「道路工学講義ノート」に出会い、高速道路線形を3次元で考えることを着想した。オンデルマル「道路工学講義」ならびに雑誌「Routes et des Aerodromes」に掲載された Godin の幾何構造論の2つの論文にただ1行のみ、道路線形を立体的に考える示唆がなされていたが具体的な言及はまったくなかった。この着想は、学部時代から考えていたので、3次元的道路線形の微分幾何学的研究に関心を向けるきっかけとなった。ノルウェー旅行中、トロントハイム駅の待合室で、早朝発のストックホルム行きの急行列車を待ちながら一夜を明かした時、かなりはつきり意識し、一晩中、数式をひねって白夜を過ごした。

星野和教授の道路線形論の講義を聴講した時から、線形を縦断と平面に分解することにいささか違和感を持っていた。実務的には合理的な方法だが、立体曲線論を持ち込むとどうなるかという、漠然たる疑問を持った。1960年代において、道路の線形設計はすでに完成した技術であり、学術論文はほとんど見当たらなかった。しかし、立体線形論の可能性を試したかった。フルネ標構と接触平面上に投影された立体曲線の見え方が問題であった。縦断線形と平面線形の調和とは何か。経験則の曖昧さを検証し、定量化することに成功した。永いこと眠っていた疑問に、具体的な形をとった解答が学位論文である。

c) その他の研究

CGによる地形・土木構造物透視図、アニメーション：大型計算機（HITAC7090）導入期、フォートランを

習得した。16mm フィルムへ動画を出力する研究を開始した。道路線形のアニメーション化について、橋梁等の立体造形の透視図計算・自動製図に取り組んだ。土木学会から神戸・鳴門ルート吊り橋のうち、特に主塔のデザイン調査が委託され、委員に加わり、本州四国連絡橋に初めて CG を応用し、デザイン実務への手ごたえを感じた。

土木学会にて土木製図基準の委員会に加わった。自動製図などの新技術の現場に接した。この時期、右を向いても左を見ても、大型電子計算機を使う研究ばかりで、いささかウンザリ感を持っていた。

4. レジリエンス研究へのアプローチの視点

難易度の高いプロジェクト遂行時に発揮されたレジリエンス能力を見出し、既存研究におけるレジリエンス能力の構成要素と突合したうえで、その形成プロセスを解明することが本研究が最終的に目指すところである。ここでは、中村良夫氏の生い立ちや思想形成に影響を及ぼしたであろう教育期に着目して、レジリエンス研究へのアプローチの糸口を見出そうとするものであり、その視点を以下に整理する。

(1) インタビューの振り返りにみる視点

幼少期～小中学校期は、『異境と越境の旅—二つの故郷—』と回顧している。「異境」や「異界」に身を置くことが多かったのと同時に、その環境が目まぐるしく変化する「越境」という体験は、「その後のいかなる学校教育よりも大きな精神的な衝撃力をもっていった。」とも述懐しており、中村良夫氏の思想形成に影響を及ぼしたのは間違いない。逆境とまでは言えないかもしれないが、唐突に未知の世界に身を投げ込まれ、それを愉しむ体験は、“精神的”体幹を鍛えたであろうことは想像に難しくないし、後年経験することになる「他流試合」にもこれらの経験が活かされたのではないだろうか。さらに、時間と空間の変化に富んだ自然界での生活は、中村良夫氏の情操、知性の精神世界の基層形成に影響を及ぼしたと考えられる。この経験が、後年の「教養学的な知的放浪癖」として頭をもたげたのかもしれない。

奇しくも、これらの環境が幼少期中村良夫氏の周辺に常に配置されていたことは偶然の為す仕業に他ならないが、これをどう受け止めるかは人によって千差万別であり、重要なことは「良質な気づき」がそこに存在したかどうかである。この「良質な気づき」が、様々な経験をレジリエンス力へと昇華させる重要なカギとなりそうである。

ただし、これらのエピソードは、永い人生経験を経た現在からの振り返りであり、良質なバイヤスが掛かって

いる可能性があることは、この時代に限らず全編にわたって注意が必要なところである。いずれにせよ、このような環境の中での体験が、中村良夫氏にどのような影響を及ぼしたかを今後明らかにしていくことが必要である。

なお、この時期における学校生活に関する発話がほとんど無く、唯一中学校時代の技術への関心の芽生えで登場する程度であることも興味の対象である。

高校～大学時代は、『教養学的な知的放浪癖に感染—そして迷いと感動の時代へ—』と回顧し、ここから得られた教訓は、『迷わずに迷へ』である。モンテニューに準えて、「私は何を求めて旅をするのか？それを知るためだ」とあるように、誰にも時代の先など読めはしないし、迷いの闇から湧きだす感動に身をゆだねる時代があることの重要性を説かれていた。

中村良夫氏の言うところの「大学時代は迷いの時代だったが、今にして思い返せば、抵抗させ、迷わせるのも大学教育の一環かもしれない。迷うのは、青年の特権であろう。」は、“知的”レジリエンス能力（本稿ではこのように呼称する）の存在と、少年期も含めてその獲得時期に対して重要な示唆を与えているように思える。

現に今回のインタビューを通して、長時間のインタビューにも拘らず、淀みなく泉のごとく溢れ出る、教養に裏打ちされた知識に圧倒された。改めてその知識の豊富さと奥深さに感嘆すると同時に、工学における一般教養の重要性の再確認と、“知的”レジリエンス能力というこれまで想像していなかった別の角度からのアプローチに関するヒントを得たものと考えられる。

日本道路公団～東大助手時代は、『他流試合への旅路』と回顧している。これもレジリエンス能力の形成にとって、重要なキーワードとなる。中村良夫氏は、恩師の鈴木忠義先生から多大なる影響を受けており、「他流試合せよ」の言も忠実に実行してきたという。「自分の興味を封じず、ある着想に魅入られたら、突き進んでみる。その過程で当初の目標からずれたところに、思いがけない鉱脈を見つけることがある。」「研究上の矛盾との執拗な格闘が新しい道を拓く。」「不完全性こそが行動の原動力となる。」「良質な問題点への気づきが重要である。」等々、レジリエンス能力形成の解明に向けたアプローチに対して示唆に富んだものである。

パリ大学～東大講師時代は、『フランス留学の余韻からその発酵へ』と回顧し、好奇心全開の時代と位置付けている。いわば、大学時代の知的放浪の実践期にあたりと考えるとよさそうである。興味を感じたら執拗に追求する姿が垣間見える。

(2) 分析の視点

ペンシルバニア大学心理学科レジリエンスプロジェクト代表のKaren Reivich(2002)の研究では、レジリエンス能

力の構成要素には、Emotion Awareness and Control (感情認識と制御), Impulse control (衝動制御), Empathy (共感力), Realistic Optimism (現実的楽観主義), Causal analysis (原因分析力), Flexible Thinking (柔軟な思考), Self-efficacy (自己効力感: 自分が達成できるという信念), Reaching out (働きかける能力) の 8 種類があるとされている。本研究は、最終的にこうしたレジリエンス能力の構成要素と困難なプロジェクトの遂行との関連性、そしてレジリエンス能力の形成プロセスについて解き明かそうとするものである。

一方で、中村良夫氏のライフストーリーからは、プロジェクト遂行に向けた強靱さとは、意見を貫く意志の強さやマネジメント能力だけではなく、奥底に秘めたる情熱と圧倒的な教養を背景とした、しなやかな“知的”レジリエンス能力というものがあるかもしれないということが見え隠れする。すなわち、圧倒的な教養は、時に圧倒的なリーダーシップに勝るとも劣らないレジリエンス能力として、力を発揮する可能性があるのではないだろうか。そして、これもある種のレジリエンスの形ではないだろうか。これら“知的”レジリエンス能力の構成要素、あるいはその形成プロセスに新たな視点を盛り込むべきかではないかと考えるに至った。

また、レジリエンス能力の形成には、好奇心や興味、没頭する力といった先天性の高いものと、社会環境や人との関わりによって後天的に獲得し得るのに分解する必要がある。そのうえで、レジリエンス能力の構成要素を整理し、これらの組み合わせの中から一般化して応用可能なものを抽出する作業が必要であると考え、つまり、先天的な能力で問題解決が可能な構成要素は、持って生まれた個人の素養であって一般化に向けた如何なる操作も難しい。その制約条件の下で獲得される構成要素の一般化も困難を極めそうである。さらに、後天的に獲得するレジリエンス能力の構成要素が絞り込まれたとしても、その獲得に適切な時期が存在するであろうし、能動性の高いものや偶然の産物から受動的に獲得に至るものもありそうである。すなわち、レジリエンス能力の構成要素が解明された後の一般化への展開に向けては、レジリエンス能力の構成要素の先天性・後天性を見極め、その獲得時期、獲得のための必然性と偶然性等に区分して整理し、これらの組み合わせ問題を解くことが重要であると考え、

5. 今後の課題

本研究は、土木計画の先駆者のライフストーリーをデプスインタビューによって収集し、困難なプロジェクトを打開した先駆者たちが、どのような経験を経て、どの

ような発想・努力を行ってきたのかを明らかにし、レジリエンス能力が形成される過程を解明することを目的とする。本稿では、その端緒として中村良夫氏のデプスインタビュー調査について、主に教育期に焦点をあててその概要を紹介するとともに、若干の考察を加えて今後の研究の視点を整理した。

今後は、困難なプロジェクト遂行時に発揮されたレジリエンス能力の構成要素を見出し、それがどのようにして獲得されたのかを明らかにしていきたい。具体的には、幼少期からの経験の蓄積の振り返りをテキスト化したライフストーリーテキストデータから、「逆境や困難な経験」→「その際の思考」→「その結果」を時系列で抽出し、ある逆境に対する経験が次の逆境や困難な経験の克服に生かされたのかを把握し、どのようにレジリエンス能力が構成されていったかを整理する。そして、「レジリエンス能力獲得・形成フェーズ」→「当該プロジェクトで発揮されたレジリエンス能力」→「その能力にもとづく思考と判断」→「当該プロジェクトの結果 (実現, 延期後実現, 未実現or 失敗)」→「当該プロジェクトによる経験のフィードバックによる能力強化」といった関連性を見出していきたいと考える。

謝辞: 本研究は JSPS 科研費 JP16H04431 の助成を受けたものです。本インタビューにご協力いただいた中村良夫氏、並びに、インタビュー場所の提供や意見交換において貴重なご意見をいただいた、野中健司一級建築事務所代表の野中健司氏に感謝の意を表してここに記す。

補注

- [1] 歌人。中学生のころから現代詩をつくり始め、1968年、若い人社文学会に参加。1974年、加藤克巳に師事し、歌誌「個性」に入会(2004年終刊)。1994年1月、佐藤信弘と「詞法」を創刊、2004年4月、「熾」と改め、代表となる。
- [2] 後年、古河公方公園の東屋を「春草席」と名付けた。漱石の漢詩に酔う「空中ひとり唱う白雲の吟・・・」夢のような知的放蕩を楽しんだこの時期に、やや精神的流浪へ傾く気風が生まれたかもしれない。いま老境に至ってなお、池塘春草の夢、未だ覚めず・・・の気分から抜けられない。日比谷高校の人脈、立地、雰囲気から受けた薫陶は、人生の基調音になった。
- [3] 後に知ることになるが、戦前の教授は皆、実務経験が豊かだったが、戦後の教授はほとんど実務経験がない。むしろ経験学を脱して、物理学や電気工学等を理想とし、土木の理論的体系化を目指したようだ。しかし、戦中の技術者不足を補うために発足した第2工学部では、実務派の教師がおおく、多数の異才を育てたとされる。鈴木忠義先生はその一人で、内務官僚として外来講師をした石川栄耀の「都市計画」を直に聞き傾倒したという。
- [4] 総合化する設計学の欠如が、機械工学科、電気工学科

から湧きあがったのはようやく 30 年後であり、解析偏重は土木だけでなく、ほかの工学諸科も同じとわかった。

- [5] 後年の鈴木忠義教授の言「学生の指導はエンジンがかかるまでいい。とくに博士過程は院生が教授を指導できなければならない。」
- [6] 「ヨーロッパとはなにか？」という基本的な問いかけに少し答えらしきものを見たのはようやく定年後である。近代日本への反省につながるこの問いは生涯の友となった。
- [7] 八十島先生は鉄道、道路、国土審議会など交通計画、国土計画に関わりながら、一方で鈴木忠義先生を農学部助手から土木へ戻したのは、観光、景観という大きな展望があったからだと思う。
- [8] 今をもって完全な氷解には遠い道のりが続くが、景観という言葉の彼方に「風景学」を構想する、この荆棘の凸凹大地との難行こそが、私の思考の土壌と方法を用意したと思う。一生をこの豊穡な泥沼の中でもがき回る過程で私の知的放浪癖はさらに多くの学際的な越境を体験した。そればかりか、この葛藤こそは、喜寿をこえた今の今まで私の研究人生にたえず豊かな糧食を送り込んだエネルギー源であったと今になってつくづく思う。私のすべての研究と実践のなかに、「空間の意味と価値」という空間人間学の格闘が、見え隠れしている。もしこの難問を背負わず、投げ出していたら、私は中年ですでに老いていたであろう。
- [9] Deutch de la Meurtre : 事業家・慈善家, André Honorat : 学生交流を通じた国際親善と世界平和に心血を注いだ政治家・上院議員・文部大臣

参考文献

- 1) 中村良夫：土木構造物の造形論，土木学会誌，第 50 巻，第 4 号，pp.15-21，1965.
- 2) 中村良夫：土木空間の造形，技報堂，1967.
- 3) 鈴木忠義，中村良夫，田村幸久（編著）：サービス施設と道路景観工学，技術書院，1973.
- 4) 中村良夫，中村良夫（編訳：ハンス・ローレンツ著）：道路の環境と景観設計，鹿島出版，1976.
- 5) 中村良夫：風景学入門，中央公論新社，1982.
- 6) 細川護熙，中村良夫（企画構成）：景観づくりを考える，技報堂出版，1989.
- 7) 中村良夫（コーディネーター）：新風景を求めて，広島市都市計画局都市デザイン室，1997.
- 8) 中村良夫（編著）：研ぎすませ風景感覚 1 名都の条件，技報堂出版，1999.
- 9) 中村良夫（編著）：研ぎすませ風景感覚 2 国土の詩学，技報堂出版，1999.
- 10) 中村良夫：風景学・実践編，中央公論新社，2001.
- 11) 風景を愉しむ 風景を創る～環境美学への道～，日本放送出版協会，2003.
- 12) 中村良夫：風景を創る～環境美学への道～，日本放送出版協会，2004.
- 13) 中村良夫：湿地転生の記，岩波書店，2007.
- 14) 中村良夫：風景からの町づくり，日本放送出版協会，2008.
- 15) 正師鈴木忠義先生を囲む有志一同（編集）：鈴木忠義先生の言葉，当て塾，2008.
- 16) 中村良夫：都市を創る風景～「場所」と「身体」をつなぐもの～，藤原書店，2010.

(2018.4.27 受付)

Oral History of Dr. YOSHIO NAKAMURA for elucidation of Resilience Skills

Yasuhiro NONAKA